

大阪府人権擁護委員連合会長賞

人権に国境はない

高槻市立阿武山中学校 三年 小林 こばやし さくら

今年の五月に日本で開かれた、伊勢志摩サミットの機会を利用して、アメリカのオバマ大統領が、被爆地である広島を訪問した。この広島訪問については、正式な発表がある二か月ほど前からニュースなどテレビ番組で評論家やコメンテーターの人が、訪問が実現するのか、しないのか、原爆投下に対する謝罪の言葉があるのか、ないのか、などについて議論を交わしていた。私は、このニュース番組を見て、これまで現職のアメリカ大統領が広島を訪問したことがないことを初めて知り、少し驚いた。

戦争は多くの人の自由を、幸せに生きる権利を奪う。原子爆弾はその破壊力の大きさから、一度に何十万人という人の命を何の区別もなく奪ってしまう。たとえ、子どもや赤ちゃんであってもだ。オバマ大統領と言えば、大統領に就任して三か月後、チェコで行われたプラハ演説で、核廃絶への具体的な目標を示したことが評価され、ノーベル平和賞を受賞している。核廃絶に向け、強い信念を持っているオバマ大統領だからこそ実現した広島訪問だと思ふ。オバマ大統領の広島訪問は、日本中の注目を集め、翌日のテレビではこのことを大きく取り上げている番組が多かった。私は、お父さんが見ていたニュース番組を途中から横に座って見ていた。すると、オバマ大統領がスピーチを終えたあと、被爆者の代表として参列していた坪井さん、森さんの方にまっすぐ歩み寄り、言葉を交わしている映像が流れた。この様子は感動的だった。特に、オバマ大統領が感極まった森さんを抱き寄せ、背中を優しくなでる姿には心を打たれた。すると、私のお父さんが、

「この森さんという人はすごい人で、その努力というか、苦労が報われた気がしたんやろうな。嬉し涙やな。」と言った。テレビの方を見ながら、小さな声で言ったので、独り言か私に言ったのか、よく分からなかった。聞き返そうとお父さんの方を見ると、お父さんも感動している様子で声をかけられなかった。

森さんについては、インターネットを利用して自分で詳しく調べた。お父さんの言った通り本当にすごい人だった。私は全く知らなかったし、考えたこともなかったが、広島原爆投下により亡くなったアメリカ人がいた。日本に捕虜として捕らえられていたアメリカ兵だ。三十八歳でこのことを知った森さんは、会社勤めをしながら、それ以降四十年もの歳月をかけてひたすら調査に打ち込んだ。亡くなった捕虜の名前も、正確な人数も分からないところからのスタートだった。今のようにインターネットもなく、戦争の混乱や原爆投下で資料は消滅し、情報を探すだけでも大変だったはずだ。しかも、周りの人から非国民のような非難を受けることもあったそうだ。その森さん自身、爆心地からわずか二・五キロメートルの小学校で被爆している。奇跡的に助かった経験から森さんは、何としてもご遺族を探し出して、愛する人の最後についてお伝えしようと、自分の心に誓ったそうだ。そして、決して諦めず調査を続けた結果、ついに最後の一人である十二人目の捕虜の存在を特定し、すべてのご遺族を探し出して連絡を取ることが出来た。私が森さんだったら、ここまで出来ただろうか。人種や民族を越え、すべての人間が人間として尊重され、自由であり、平等でなければならぬことは学校で学び、頭では理解していても、敵国として戦い、自分や自分の家族の人生を破壊したアメリカ兵に対して、森さんのように寛容になれるのだろうか。森さんと一緒に参列された坪井さんは、

「私は謝罪を求めているわけではない。世界最初の被爆地である広島から、核廃絶に向けた祈りを共に発信してもらいたい。」

と、おっしゃっていた。私は、森さんと坪井さんから人間の優しさと強さを学んだ気がする。また、広島には原爆で亡くなった人のために数十個の慰霊碑があるが、亡くなったアメリカ兵捕虜のためのものはなかった。森さんは、自らお金を出して十二人の被爆アメリカ兵捕虜の記念碑をも建てた。

私は、この森さんの活動を知って、温かい気持ちになった。敵、味方関係なく亡くなった人を悼む気持ち、残された者の痛みを思いやる気持ち、そこには国境はなく、同じ人間として互いに敬い、共に生きていく人間としての本質に触れたような気がした。将来、被爆アメリカ兵捕虜の記念碑を訪問し、献花と共に弔意を捧げたいと強く心に思った。